

研究ノート

バリの風土と家系についての考察 (IX)

松 原 正 道

序

前稿では鈴木政平『日本占領下 バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』（草思社 1999）及び、榊原政春『一中尉の東南アジア軍政日記』（草思社 1998）を主に、「大東亜（太平洋）戦争」中の日本（軍）による東南アジアにおける占領政策（軍政）の一面について、特に、バリ（島）における教育を中心に考察をした。

そこで見られたものは、日本がアジア諸国に示した「大東亜共栄圏」構想が全てに介在しており、それに付随して、「八紘一宇」の精神がこれを補っていると言う事である。

そして、こうした日本に対し、欧米の植民地主義の下に抑圧された「生きる」を余儀なくされていたアジア諸地域の人々がこれを受け入れ、更に、これを利用して自らの民族の自立、独立の夢を果そうとした事だった。

特に、インドネシア地方（オランダ領インド 蘭印）では、日本（軍）の目覚ましい進出（侵攻）のために、「日本軍が極めて短期間に蘭印の大軍を破ったことにインドネシア人は驚き、白人神話は崩れ去った。ここでも『白馬にまたがる英雄が率いる神兵がきて、インドネシア独立を助けてくれる』という民間伝承があり、日本軍はその神兵に擬せられ、いたる所で大歓迎を受けた」⁽¹⁾と言われる様に、白人の支配下にある自分達を救ってくれる日本（軍）として写ったのである。

従って、「大東亜共栄圏」、「八紘一宇」と言った、その字面からするとアジアの人々にも喜ばれるような理念と相俟って、「大東亜（太平洋）戦争」開戦当初、日本（軍）は解放者としてアジア諸地域で受け入れられる側面を持っていたのだが、それも、その実践と言う事になると、色々な面で問題が起こる事になるのだった。

そもそも、「大東亜共栄圏」にしても、「世界を一つの家」と考える「八紘一宇」にしても、飽く迄も、日本のためのそれであり、日本の国益を優先してのものだったのであって、アジアの人々の事を何処迄考えてのそれだったのか、その点で、彼らとして素直にこれを受け入れる事が出来ない要素を孕んでのそれだったため、彼らは、これを利用はしたが、心服

(1)

していたかについては疑問が残るのである。

その上、字面からすると立派な理念でありながらも、その実践と言う事になると随所に問題が起こる要素が内在していたのである。

特に、「土人」とか「黒ん坊」と言った言葉遣いに見られる、現地の人々を一段低く見る見方、これがあらゆる場面で顔を出す事となり、それが住民による反日感情を醸成させる事にもなったのである。

従って、本稿では、こうした両者の関係を、「大東亜（太平洋）戦争」の期間を通して、日本人の持つ精神構造、行動様式の在り方を中心に考察していきたいと考えている。

本論

I

外国と関わる事において、国と国、集団或いは組織同士のそれは固より、個々に接した人間の在り方によって、その国及びその国の人々への印象、理解に大きく作用すると言う事は、現在においても言えるのであって、その点で、これを職業とする政治家、外交官を始めとする、それに関わる人間の個々の資質、その在り方が重要になってくると言えるのである。

この点に関して、陸軍々医候補生見習士官として、25歳でソ連軍の捕虜となり、ボルガ河の支流カマ河畔エラブカで3年間の収容所生活を送った鬼川太刀雄氏は、「万邦に冠たるドイツ人は、ロシアの片田舎で盟友日本軍将校の食糧の上前をはねていた。（中略）日独防共協定は、まさにエラブカの地で（共産主義の膝下で）悲惨なる結末となって終焉した。つまり、ドイツ捕虜のとった、“独ソ親善協定”のために日本人の一部は危うく死にかけたわけである」⁽²⁾と言い、更に、『『食い物の恨みからいっても、ゲルマンは許せない。ロスケより許せない』と歯がみして口惜しがり、反独、つまりドイツ人排斥運動が、次第に広がっていった」⁽³⁾と言うのである。

そして、前稿で見た今日のバリ（島）について、「冒険ダン吉の世界の様だ」と言う言葉は、東京大学出身で一部上場の一流企業の重役だった人間のそれで、幼少時に親しんだ話との関わりで言った事ではあるが、受け取り方によっては優越意識を感じさせなくはないのである。

その点で、現在でも、特に、高学歴、社会的地位の高い者、金持ち達の一部に見られる他者を見下すような物の見方、時に、差別意識、これは、人間の持つ本質的一面として仕方ないと言えなくはないのではあるが、「大東亜（太平洋）戦争」（昭和16〈1941〉年12月8日－20〈45〉年8月15日）に多大な関わりを持った陸軍幼年学校、士官学校、陸軍大学校、海軍兵学校、海軍大学校と言った一貫したエリート教育を受けた者達、彼らの中には、若くして要路に立ち、また、外地（外国）に進出（侵攻）し、現地の人々と関わる者が多かったわけ

だが、彼らは、果して、何処迄世間の事、また、進出先の事を知り、それを理解してこれに携わっていたのだろうか。

その点では、「土人」とか「黒ん坊」と言った言葉を使っている等、また、「優等国日本(人)」が、「劣等(発展途上)国民」を教育・指導するのがその努めであると言った姿勢を、42歳の若いとは言えない前述の鈴木氏の著書からも感じさせられるのである。

今日、「世間の常識、学校の非常識。学校の常識、世間の非常識」と言う言葉が言われている。

採用が厳しいために金品の授受が取り沙汰されている教員採用試験、その勉強のため、世間の事について疎くならざるを得ない上、企業と比べ新人としてもまれる事も少なく、採用と同時に仲間内、保護者、生徒から「先生」と言われ、専門的知識はあるかも知れないが、研修等仲間同士では集る事はあっても、時間がないと言う事もあり、自分の住む地域は疎か他の社会の人間と積極的に関わる事の少ない教員、従って、上記の言葉は、特に、身分、生活が保証され、失業の心配のない公立学校関係者に対して言われる事が多いのである。

学校が地域住民にとって近寄り難いと言われている点で、上記の言葉は否定し得ない面があるかも知れない。

教員一人一人は何処迄エリート意識を持っているか分からないが、公立学校の世界で「世間の常識」が通りにくい一面が、世間を騒がせている採用、昇進に伴った疑惑に繋がっているとも言えるのである。そして、そこに、「学閥」と言うものが結びつく事によって、事は、更に、厄介になり、正に、「学校の常識、世間の非常識」が倍加する事にもなるのである。

その点で、旧軍隊にあっては、その指導的立場にあった者は殆ど同窓であり、陸軍と海軍との齟齬について指摘されるが、それぞれにあって士官学校、兵学校でない軍学校、或いは、学徒動員等で応召した者達等との関わりは如何がだったのであるか。一般の大学を卒業した軍の幹部の話はあまり聞かないのである。

専門的な知識には詳しく、そのため些末な事にも細かい配慮をし、専門家であるが故に敬意も表されるのだが、そのために、専門家になればなる程、広い知識の修得と大局を見る事の訓練が乏しくなる側面があるにも関わらず、自論に絶大なる自信を持ち、それを声高に主張し、エリートであればある程、他者の意見を入れる事が少なく、自説を強要する傾向を持ち、そうした者によって、物事の大勢が決まっていく事が社会にはしばしばあるのである。

専門家が専門的知識を以て行った事による失敗、それを、我々は、今日、学校行政に、農政にその代表例を見るのであって、そこには、エリート、専門家による官僚主義に基づく、大局が見過ごされがちな「省益あって国益なし」と言われる縦割行政が展開され、施策が実行されるのである。

そこに、「我欲」が結びつくと、報道で、自らの年収程度の細やかな金額を以て逮捕され、

その後の「生きる」の道を自ら閉ざした事務次官の汚職が取り沙汰されたが、これも、エリート・コースを歩んできた者の「世間の常識」を弁えない、大局観のなさの現れと言えるだろう。

この点について、「入営以来余りインテリじみたことのない僕等には、言うに言われぬ親しみがある。やはり学問と芸術は大切だ」⁽⁴⁾と言う、昭和13年に召集されて3年半の軍務で、これらに接する事がなかった点についての前出の榊原政春陸軍中尉の述懐があるが、こうした事が「世間の常識」から懸け離れていく事になるので、彼の場合、まだ、それを認識する余裕を持っていたと言う事で救いがあったと言えるだろう。

指導者、特に、若くしてその立場を得た者に見られるエリート意識、その上、エリートであればある程、他者との連携を嫌う傾向、我々は、それを縦割り行政に見るのではあるが、「大東亜（太平洋）戦争」当時の陸軍と海軍、更に言えば、陸軍省と参謀本部、海軍省と軍令部との確執が戦争の方向を危うくした点についての指摘がなされるが、そこには、専門家、エリートに見られる世間知らずによる大局観の欠如に伴う独善性が介在していたと言えないだろうか。

他方、経験は豊かだが、二度目の勤めの者に見られがちな「事なかれ主義」に繋がる事もあってか、予備役少将を始めとした勅任司政官5人がボルネオに赴任してきた事について、28歳の少壮の榊原中尉は、彼らに何が出来るのかと批判しているのである。⁽⁵⁾ここに、若さ故の「思い上がり」がなければ良いのであるが。

エリート、専門家故の世間知らずによる大局観の乏しさに加えて、これも無知に繋がり国の発展、行方に致命傷を与え、彼らの権威づけにも利用され「大東亜（太平洋）戦争」勃発時には、意図的にそれが喧伝されたため、国の隅々に迄浸透していった「神国（州）日本」と言う世界観。これを開戦時の首相、東條英機陸軍大将の様な国の指導者を始めとして、前戦の指揮官、兵に至る迄持っていたところに、この戦争の取り返しのつかない悲劇があったと言えるのである。

この点について、8月15日の「終（敗）戦」記念日前後になると、毎年、色々な所で戦争及び戦争中の事が取り沙汰されるのだが、平成20年8月12日（火）付朝日新聞の夕刊に、「東条元首相 終戦直前の直筆メモ（抜粋）」と言うものが掲載されていた。連合国側が提示した無条件降伏を政府が受け入れようとしている事に対して、八月一四日の項に、「一、（略）国民の難きを忍び、皇軍兵士の神国日本の不滅を信じつつ大義に殉ぜる犠牲も遂に犬死に終らしむに至りしことは、前責任者として其の重大な責任を痛感する処、陛下は元より列代皇祖皇宗の御遺霊に對し奉り、申訳なき次第なり」（傍点 筆者）と言うものがあった。

陸軍大学校を優秀な成績で卒業したと言われているエリートの彼も、「神国日本の不滅」と言う言葉を遣っているのである。戦闘が国内に及び、原子爆弾を最たるものとした度重な

る爆撃により国土が灰燼に帰しているにも関わらず、未だこうした事を言う彼の心理及びその精神構造形成過程について関心の眼が向くのである。

尤も、こうした認識は、彼だけのものではなく、国民の中にもそれはあり、これがどの辺りに起因しているかが問題なのである。固より、時間の経過の中で醸成されてきていたわけではある。

このような、「神国（神州）」、そして、その「不滅」を口にした「思い上り」と言える唯一絶対的国家観を持つ様になった国民、これを以て始まった「大東亜（太平洋）戦争」だったにも関わらず、アジアの人々の中には、「日露戦争はアジアの人々を眠りからよび覚ました。自民族の維新の意義を正しく認識するならば、アジアの小国ですら、ヨーロッパの大国に打ち勝つことができるということを、その戦争は示していた。アジアとインドネシアのその後の政治の発展の中で、その戦争における日本の勝利の意味は、はかりしれないほど大きいものがあった」⁽⁶⁾と言われるように、アジアを抑圧した白人の国の大国ロシアを敗った日本（人・軍）に対する絶大なる期待を持っていた者も少なからずいたのである。



水師営① 及木・ステッセル両将軍会見所全景



水師営② 会見所内部



二百三高地① 旅順港を望む



二百三高地② ロシア軍要塞跡

特に、インドネシア（蘭印 オランダ領インド）では、前稿でもふれた「『ジョヨボヨの予言』というものが語り伝えられていた。ジョヨボヨ（Joyoboyo）とは10～13世紀ごろ広く

インドネシアを支配したクディリ王朝の国王であり、数多くの予言を書き残している。そこには、(中略)『白い肌の人々の支配は長くつづくが、やがて、北から黄色い人々がやってきて、白い肌の君主を追い出す。彼らは天から白い布をまとめて降りてくるだろう』⁽⁷⁾と言われる言い伝えの故に、それは一層強かったと言えるのである。

欧米流の近代化を受けいれて間もない極東の小国日本が、ユーラシア大陸にまたがる白人の大国ロシアを相手に勝利した事は、白人の支配に呻吟していたアジアの人々の民族意識を覚醒させるのに多大な役割を果たしたのである。その点で、アジアの人々の中には、基本的に日本(人・兵)を受け入れる素地があったと言えるし、彼らにとって日本(人、軍)は頼もしく、且つ、利用価値がある存在だったのである。

どの人、どの民族でも相手が利用価値と言える、自分の成長に役立つ側面がある事で、そこに親交が生まれてくるのであって、対等な立場であればある程これが重要なものとなってくると言うのは、人間の持つ一面の真理と言えるだろう。

それは、民族、国と言う枠組みにあっても言える事で、そこには、時に、打算が伴う事も否定出来ないのである。その点に関して、「白人種をインドネシアから追放してくれる伝説的“救世主”の化身に、日本を祭りあげようとしていたのである」⁽⁸⁾と指摘される一面があったのである。

そして、それは、「大東亜(太平洋)戦争」に繋がる事になるナチス・ドイツ支配下のヴィシー政権の下で、昭和16(41)年3月に行われた日本軍の仏印(フランス領インド)への無血進出(侵攻)に始まり、「大東亜(太平洋)戦争」勃発に伴う、昭和17(42)年1月11日、セレベス(島 スラウェシ)のメナド(マナド)への海軍の、2月14日のスマトラ(島)、パレンバンへの陸軍の、「天から白い布をまとめて降りてくる『神兵』に擬された」落下傘部隊の降下が、その期待を、更に、高めさせていく事になるのだった。

尤も、そこには、「植民地主義の桎梏からの解放」と言う大義名分を掲げてはいるものの、アメリカによる対日石油禁輸による石油事情の窮迫打開のために東南アジア、特に、インドネシア(蘭印)にこれを求めると言う、日本にとっての目先の問題が優先されていたのである。

そう言いながらも、日本(人、兵)の在り方、行動は、ビルマのアウン・サン、インドのボース、インドネシアのスカルノ、ハッタ等の民族・独立運動に資する事になるのである。彼らは、日本によって覚醒された民族(独立)意識、それは、日本の力を以てしてより現実化されるとし、その力を活用する事で、自らの目的を克ち得ようとして、直接的、積極的に接触を持つ事になるのであり、彼らは、その立場立場に従って、具体的に日本及び日本人(軍)と関わっていくのである。

そうした中で、スカルノは、オランダ人により1932年に再逮捕され、42年迄フローレス島

ヤスマトラ（島）のベンクーレンに流刑されていたが、インドネシアを占領した日本軍に解放され、これに関わる事になり、やがて、「大東亜（太平洋）戦争」終結直後の45年8月17日に「独立宣言」をするのだった。

そして、彼と共に独立を宣言したハッタは、オランダ留学中（1922-32）に留学生の政治組織インドネシア協会の会長として活躍、帰国後、対オランダ非協力運動を展開した事により逮捕され、西イリアンに流刑されるが、これも、42年に日本（軍）によって解放され、以後、民衆の総力を結集したプートラ運動の指導者として日本（人、軍）との関わりを強めるのである。

従って、それは、パレンバンへの日本陸軍落下傘部隊の降下に際して、「交戦中に、製油所の従業員とおぼしき人達が隊員にコーヒーや食糧をもってきてくれたり、武器を渡してくれれば、日本軍に協力して連合軍と戦うという意思表示を示したそうである。

さらに重要なことは、連合軍側による製油所の計画的爆破が、現地人従業員により阻止されたことである。」⁽⁹⁾と指摘される、インドネシアの人々の具体的行動を以て、日本（人、軍）は受け入れられたのである。

そして、それは、更に、昭和18（43）年7月の東條英機首相のパレンバン訪問によって一層の高まりを見せるのだった。「支廠に併設された石油工業学校の生徒を閲兵した。整然と並ぶ隊列の中へ入っていき、いちいちうなずきながら生徒たちの間を歩き回った。総理一流のジェスチャアが入っていたであろうが、長い間の白人支配下で身分上の差別を強く受けていたインドネシア人にしてみれば、それも感受性の強い若者たちだけに、同じアジアの首相の閲兵を受けたということで、大変な感激として受けとめられた」⁽¹⁰⁾と言われる効果を以て示されたのである。

こうした彼らの日本（人、軍）受容については、多少の濃淡の違いはあるものの、支配者オランダ人と比べて姿形が似ている日本人と言う点にもあると言えるのであって、人間の持つ感覚的受け止め方による理解には、自らと大きく異なった存在に対しては、それを即座に受容出来ない一面があり、それは、人種差別に繋がる、「暗闇で、黒人が突然現れたら恐怖を感じるだろう」と言った者がいたが、そうした感覚で受け止められる人間理解、その点から見た場合、日本人（兵）の東南アジアでの受容については、白人のそれとは違った受け止められ方をされたとも言えるだろう。

その上、この場合、白人は征服者であり、支配者だったのである。「草刈りの使役に行くトラックの上での出来事だが、監督として同乗していた中国軍の若い下士官が片言の日本語で私に話しかけてきた。階級は伍長、私もそうだとしたら、親しさを感じたのか、いきなりズボンをたくしあげて砲弾の破片による傷跡を見せ（中略）日本軍から受けた傷跡である。しかし私はけっして日本という国を憎んではない。中国と日本は隣同士で皮膚の色も

同じだと言って私の腕に自分の腕を並べて見せ、お互いにこれからは仲よくしてゆかなければいけない。日本は必ず立ち直る。我々は勝ったと言ってもけっして白人の軍隊を味方だと思っていないと言うのである」⁽¹¹⁾ と言い、更に、「ラバウルに連合軍として上陸してきたのは米、豪、中、そのほかに英国とオランダの軍隊もいたように思う。(中略)私が見た光景は、横隊に整列した中国軍で指揮をとる大尉が、米軍らしい白人の少尉から詰問されている姿である。(中略)連合軍の軍隊と言っても、東洋の有色の民である中国軍は、(中略)白人の軍隊から見れば員数外とでもいう存在になっていたのではあるまいか。(中略)使役の我々はただ啞然として見ていただけだが、中国軍の兵士はそのへんを敏感に感じとっていたのかもしれない」⁽¹²⁾ と言った記述から、同じ連合国同士と言うよりも、且ての戦争相手だった日本人(兵)に対してのこの中国人(兵)の親しみを持った対応をどう考えたら良いだろうか。

この話は、終(敗)戦直後の一挿話に過ぎないが、人間理解の上で、白・黒・黄色と言う人間に与えられた違い、これを考えた場合、「人類皆兄弟」とは言うものの、それを完全に払拭しての理解が必ずしも容易ではないのだと言う事も、考えさせられなくもないのである。

従って、こうした人種間の理解と言う事からして、日本人(軍)のアジアでの行動である「大東亜(太平洋)戦争」の開戦の意義、そして、戦争の位置づけが重要になってくるのである。世界史の上では、「太平洋戦争」と言うアメリカが使っている用語が一般化されてきてはいるが、日本では、飽く迄も、「大東亜戦争」だったのであって、単に、地名に由来したもののだけではなく、「(大)東亜の戦い」、それも、白人の植民地主義に対抗してと言う側面をもっているところに問題の意味があるのである。

何故、「大東亜戦争」なのか。そこには、「大東亜共栄圏」と言った精神的要素が介在しているのもあって、これが提唱された事で以て、この戦争の大義名分が成ったそれだったのである。

それに伴って、「太平洋戦争の当時の正式な呼び方は『大東亜戦争』である。つまり大日本帝国は、欧米を相手とする大戦争の目的を“アジアにおける植民地解放戦争”とも位置づけていたのだ」⁽¹³⁾と指摘される如く、アジアの人々の民族意識を昂揚させ、その独立に対する願望に応えようとする一面があったのである。

昭和15(40)年、第二次近衛文麿内閣(昭和15<40>-16<41>)の時に提唱された「大東亜共栄圏」とは、正に、アジア(の人々)が一体となって共存共栄していくと言うものであり、後を受けた東條英機内閣(昭和16<41>-19<44>)では、そのために、昭和18(43)年に、東京で、「大東亜会議」を開催するのだった。

これには、中国の汪精衛行政院長(首相)、満州国々務総理(首相)張景恵、タイ国首相

代理ワン・ワイタヤコン、フィリピン大統領ラウレル、ビルマ首相バ・モーが出席、自由インド仮政府のチャンドラ・ボースが陪席したのである。

そこで、「米英の『大西洋憲章』に対抗、日本の大義『大東亜共栄圏』構想を初めて世界に問うものだった」⁽¹⁴⁾と言われる、全会一致で採択された「大東亜共同宣言」（11月6日）において、「(1)大東亜の安定を確保し、道義に基づく共存共栄の秩序を建設、(2)大東亜の親和の確立、(3)大東亜の文化高揚、(4)経済発展をはかり、大東亜の繁栄を増進、(5)世界の進運への貢献」⁽¹⁵⁾と言った事が盛りこまれたのである。

そこには、「大東亜各国の共存共栄秩序の建設、自由独立の尊重、互惠提携をはかり、『大東亜を米英の桎梏から解放する』」⁽¹⁶⁾と言った「大東亜会議」についての定義づけがなされその大義名分が付加されているのだった。

こうした「大東亜共栄圏」構想に「八紘一宇」の精神、「世界を一つの家とする」と言う考え方、今日いわれているところの、「世界人類、皆兄弟」と言った考え方に通ずるものが加えられてくるのである。

その点で、「大東亜共栄圏」にしても、「八紘一宇」にしても、その言葉の意味或いは字面からすると、アジアの人々に受けいれられ易いものだったと言えるのである。

だが、その実体は、「帝国を核心とする道義に基づく共存共栄の確立」⁽¹⁷⁾（傍点 筆者）と定義される「大東亜共栄圏」であり、それに伴った「大東亜会議」、「大東亜共同宣言」だったのである。

従って、「八紘一宇」の考え方にしても、須く、「帝国を核心とする」と言う所にその本質があったと言えるのであって、日本を中心としての「一つの家」、「一つの家族」なのであり、その本質、実体からは、アジアの人々にとっては素直に受けいれられないものだったと言わざるをえないのである。

従って、この点で、バリ（島）に赴任していった鈴木氏の優越的姿勢にも理解がいくのである。

こうした日本（人）の在り方にも関わらず、アジアの人々の中には、自らの民族の自立、独立を模索し行動を起こす者が多くいたのである。彼らの多くは、「白人の桎梏からの解放」と「帝国を核心とする大東亜共栄圏」とを天秤にかけ、利害得失を考えながら行動したと言う事は言う迄もない事である。

こうした、「大東亜共栄圏」、「大東亜会議」、「大東亜共同宣言」、「八紘一宇」等を打ち出すに至る背景となった当時の日本の実情、立場は、満州国建設に伴う「国際連盟脱退」（昭和8〈33〉）、「支那事変」と言って「大東亜（太平洋）戦争」に引き続く事になった「日中戦争」（昭和12〈37〉-16〈42〉）の長期化による軍事的、経済的、政治的負担の増加とその打開と言う目先の現実的問題の解決に迫られてのそれだったのであり、そうしたもののた



南満州鉄道（満鉄）本社 瀋陽（旧奉天）



旧大和ホテル 瀋陽

め、日本は外交を通しての解決の途を断念して、力を以ての武力侵攻策をとったのである。

それは、仏印（フランス領インドシナ）への進出（侵攻）に始まるのだが、それによって、アメリカの対日石油禁輸政策を生み、それに伴う、日本側が言う「A, B, C, D包囲網」が形づくられ、孤（個）立感を強めさせられると共に、石油の欠乏を来す事となり、それに伴って産業、経済、ひいては、政治の窮迫感が強まっていたのだった。

そして、それは、特に石油の需要の窮迫として現れたのであって、それ迄90%を輸入に頼っていた中、アメリカにその内の70%を依存していたのだったが、それが途絶したために、経済、軍事、ひいては、政治面での緊急事項となっていたのである。尤も、それは、アメリカにとっては産油量のたった1パーセントに過ぎなかったと言うのだ。⁽¹⁸⁾

それ故に、「太平洋戦争は、石油に始まり、石油に終わった」と言えるのであって、そのための東南アジアへの進出（侵攻）であり、そのためのメナド、パレンバンへの落下傘降下だったのである。

こうした、窮迫、孤（個）立した状態の打開を図るために、一層、アジアの国々、人々との連帯を求め、それぞれの民族（国民）に積極的に働きかける事になるのであるが、それは武力を以てしてのそれだったのである。

こうした本質を根底に持つ「大東亜（太平洋）戦争」だったにも関わらず、それでも、アジアの人々にとっては、自らの民族の自立・独立の期待から、これに従い行動を共にする者が多くいたのであって、中でも蘭印（インドネシア）の人々には、自らの土地に産する石油が日本（軍、人）による開戦の大きな理由だったにも関わらず、パレンバン製油所の従業員の行動、これは、こうした日本の思惑や背景を何処迄理解してのそれだったか分からないが、支配者オランダ人に対抗してのそれであり、自らの意志に基づいた行動だったわけで、これが、日本（軍、人）を利する事になった事は間違いのないところである。

そして、その事は、オランダ人との対比ではあるが、日本人が現地（インドネシア）の人々に歓迎されたと言う紛れもない事実と言わなければならない。その点で、戦争当初は互

いの利害が一致していたのである。

そして、こうして受け入れられた日本人（軍）が、その後の時の経過の中でインドネシアの人々と如何に関わっていったかと言う事が問題なのである。

Ⅱ

陸軍幼年学校、士官学校、陸軍大学校、また、海軍兵学校、海軍大学校と言ったエリート教育を受けた軍人によって担われた国の防衛、軍事、或いは、戦争、それらはどう言うものだったのであろうか。それに携わった軍人がエリート、専門家であればある程、自らの能力を信じ、時に、過信して大局を見誤った机上の空論的意見と、それに基づいた行動に走る側面を見る事になるのである。

そして、そこに、「神国（神州）日本」、「神州不滅」という事に象徴される精神論が付け加わる事によって、本来、冷徹に計算をし、「物・心」両面が相俟っての行動がなければならない軍事、戦争の様々な場面において支障、齟齬を来す事になり、それに伴う悲劇を生むのである。

「日清・日露の戦い」（明治27〈1894〉-28〈95〉、37〈1904〉-38〈05〉）では、多くの人的損害を出しはしたが、その見極めを以て、批判を受けながらも国情に対する危機感からの早期の終結と、これを受け入れるだけの精神的健全性があったと言えるのである。

だが、「大東亜（太平洋）戦争」においては、それ以前の戦争でも既に見られ、一面、そのために多くの人的損害を出した精神主義があらゆる面に先行して、「物質」の重要性を無視した作戦、戦術が展開され、結果的に多くの犠牲を生む事になるのだった。そして、この戦争でその精神主義が最も顕著に現れたのが、「兵站」の面においてだったと言えるのだが、これが多くの犠牲を生む事に繋がるのである。

戦争遂行にあたって、武器、弾薬を始め、近代戦であればある程、自動車、戦車等の車輛、軍艦を始めとする船舶、航空機の重要性が増してくるのであって、それに伴って燃料としての石油の需要が増大するのである。

特に、「大東亜（太平洋）戦争」では、その石油を求めてのそれだったと言うところにその意味があるのであって、「物質」、更に、「物量」の重要性が無視し得ない事になったのである。

そして、こうした「物質」の問題として最も重要なものとしてあげられるのが、「食糧」のそれである。人間が肉体を持つ存在であると言う事から、「食物」の摂取は不可欠である。そのため、これの円滑な供給がなされる事により、人間が人間としての活動をする事が出来るのであって、「戦争」も人間がなせる技であると言う事からして、そのための「人」の肉体の健全性は必須で、それを支える「食糧」の供給は絶対のものとなる事は言を俟たないの

である。

ところが、これについて、「糧秣は占領した敵陣にあるものを頂戴してまかなうというのが日本軍の方針だった（中略）、この方針は太平洋戦争が始まる以前の日中戦争のころから一貫して変わらず、これを軍隊では『敵さん給与』といていたそうだ」⁽¹⁹⁾ また、「補給を軽視した軍部の命令はつねに『現地調達』であり『自給自足』であった。このために日本の将兵はどれほど苦しんだことか」⁽²⁰⁾ という指摘がなされるのである。

従って、それに伴って、「補給ルートを完全に断たれ敗走を続ける日本軍は、手当たり次第に沿道の町や集落を襲い略奪したという。進路にあたった住民たちは恐れ、日本軍が来るという情報に住民はいち早く逃げ出し、去ったあとで戻って来てみると、村は無残、物はこわされ、奪われ、目につくのはおびただしいウンコの山だったという。日本軍が通ったあとはなにも残っていないのでまるでイナゴの大群が押し寄せてきたようだと皇軍ではなく、“蝗軍”といて恐れたようだという」⁽²¹⁾ とインパール作戦の敗走の状況について記されているのであるが、ここに、日本軍の「物質」と「精神」についての考え方に基づいた、「物資」の確保と、その補給の在り方についての本質を知らされるのである。そして、「食糧は自活し自給せよということが至上命題として言い渡された」⁽²²⁾ というのである。

その点で、今日でも、色々な事情でこれが充分賄えない一面を持っているが、ある意味では、これは人類にとっての永遠の課題とも言えるのであって、古来、この「食糧」を巡っての問題は民族同士の「戦争」の根本原因ともなっているのである。

その伝で、開拓団の奨励を始めとする「満州国」の建設と、そこへの移住と言った一連の出来事、これは、正に、国内でそれが処理し得なかった事の対応であり、これが、「満州事変」(昭和6〈1931〉-8〈33〉)から、「支那事変(日中戦争)」(昭和12〈37〉-16〈41〉)へと続き、「大東亜(太平洋)戦争」に至る昭和前半期における戦争の時代の引き金になった根本原因だったとも言えるのである。

「満州国」への移住を始めとするアジア諸地域への日本人(兵)の進出、時に、武力を伴った侵攻を行わせる事になったのだが、これは、飽く迄も、日本の事情で進められた事であり、その解決のためのものであって、それぞれの地域の人々、国々の事情を鑑みてのそれであったわけではなかったと言う事である。

そこに問題の本質が存するのだが、「人」が他の国に出向くにあたって、余程、その辺りの事情を考えて行わなければならないと言う事は、今日においても同様であるのだが、現実には、それは仲々難しい面を持っているのである。

昭和の前半期において、そうした日本人による海外進出(侵攻)を立案し実行したのが、政府、軍部におけるエリートであり、専門家達だったのである。従って、そこには、上記の如く、何処迄「世間の常識」が通用する様な計画(作戦)が立てられたかどうかと言う点で

疑問が生じるのである。

その上、そこで立案、実行される計画に精神主義が加味されてくる事で以て、本来、合理的、且つ真剣に考えなければならない「物質」の重要さ、戦争行動で言えば、「兵站」の整備の重要さを考慮する事が肝要であるにも関わらず、そのための準備が蔑ろにされて行動に移される事になるのである。

それは、上記の如く、日本軍の通った跡には何も残らないと言うような「略奪」をもたらすような、「兵站」の整備を含む作戦計画だったと言う、「物質」を全くと言って良い程軽視したものとなって現れたのであり、これが色々な面で彼我の人々に悲劇をもたらすのだった。

その点に関して、「日本の兵士たちは、不便なことがあっても、文句を言ったりはしない。日本国内にも十分な食べ物がなく、ぜいたくは許されなかったのだ。戦争前の長年にわたって、大和魂は、疲労、空腹、敵の砲火といったすべてにうちかつと教え込まれていた。

ところが、私たち白人ときたら、日本人の目から見れば恥ずかしいことなのに『ほとんど抵抗もせず』戦争に負けた。そのくせ、生活に必要な物や食べ物をやたらに要求する。日本人の目には、私たちは、ぜいたくに慣れ何か気に入らないことがあるとすぐ騒ぎ立てる西洋人のイメージにぴったりだっただろうと思う」⁽²³⁾ と言うパレンバン近くの女性収容所に3年半いたコレインの記述があるのである。

「物質」、 「物資」の確保を目的として始められた「大東亜（太平洋）戦争」だったため、そこには、基本的に無理があり、それ自体、戦争遂行の目論見において、「食糧」を始めとしたそのための物資の確保、補給方法についての計画と言うと長期的見通しは疎か、短期的に見ても、「敵さん給与」の考え方が底流として存している補給、「兵站」についての在り方だったと言う事で、近代戦を闘うと言うには、全くと言って良い程計画性がなく、特に、「食糧」について言える敵のそれをあてにした戦争と言う点で、その発想は、戦利品を求めた古代、中世の戦争と変わらないと言える。

そもそも、日本が国として必要な物資を手に入れるために武力を以てしようと考えた事、それ自体間違っていたのであって、それにより、この戦争の大義として掲げた「大東亜共栄圏」の建設構想、それ自体意味をなさなくなるのである。そして、この「大東亜共栄圏」構想にしても、これを作成し実行に移したのが軍人、官僚のエリートであり専門家達だったわけで、彼らの世界観、大局観はどの辺りにあったのだろうか。

尤も、そこには欧米列強による白人の優越性、その現われとして、古くは、大航海時代の冒険者（航海者）による、己れの物欲の達成と共に両輪をなしたキリスト教の布教を始めとする西洋文明の移入に伴ってもたらされた、彼らの植民地主義の打破と言う名分があったとは言えるのである。だが、「敵さん給与」の発想で行われた戦争では、その名分が生きる余

地はないどころか、そのための略奪を伴うところから、反日感情を生む事は明らかだったはずである。

戦争の引き金となった石油を始めとする物資の窮迫によると言う点から、開戦のための体制の整備、戦争継続のための対応策の確立、その中での物資の確保とその補給体制の整備と言った、「物質」を重要視する事の問題、それは、戦争開始以前に、如何に周到に準備したとしても、戦争（闘）の推移の中での混乱によって齟齬が生じるのは必然で、周到に過ぎる準備はないはずなのであるが、そもそも、物資不足を打開する事から始まった戦争故、所詮、それは無理な話だったのである。従って、それは、ひいては、食糧の確保のための略奪から始まる対日感情の悪化をもたらすのだった。

その上、戦争遂行に必要な人的損耗の抑制、これは、戦争（闘）を担う将兵の活力（士気）を如何に持続させるかと言う、戦争遂行上の最重要事項に繋がるのであって、それは、取りも直さず、「生命」を尊重すると言う、日本と比べて欧米の方に顕著に見られる考え方、それが、戦争（闘）の勝敗を左右する事になるのである。

物資（質）の充分なる準備と兵士の士気とは相関をなしているのであって、その点で日本の戦争指導者はそれをどう考えていたのだろうか。

戦争は、「生命」のやり取りであるため、その「生命」の損耗は一面致し方ないと言わざるを得ないのだが、その損耗を如何に少なくするかと言う事は戦争（闘）遂行上の至上命題であると言えるのであって、その点で、アメリカ製の戦争映画では、しばしば、極限状態であっても、如何に「生命」を長らえさせるかと言う場面を見せられるのである。

メナド、パレンバンへの落下傘降下で始まったインドネシア地域（蘭印 オランダ領インド）での戦闘において、海からの侵攻に備えていたと言うパレンバンで見られた作戦の失敗、見通しの甘さによって生じた戦況が不利と見れば、降伏もし撤退もして他日を期すと言う事が当り前のように連合国側では行われ、ジャワ（島）でアメリカ、イギリス、オーストラリア連合軍の軍司令官として防衛にあたっていたテルプールテン中將による判断がなされる事になるのであった。そこには、オランダ人（軍）の間に、「“インドネシア人のすべてが“今こそ自分達に敵対してくる”というのを感じとり“そうなったら日本軍に勝てっこない”と思っていたからだ」⁽²⁴⁾と言う指摘にある様に、パレンバンの人びとの行動に見られたインドネシア人の民意を察知しての考え方、「勝ち目のない無駄な戦いよりは犠牲を少なくしてやるべきだ。日本人がいつまでも……永久的にこのインドネシアを占領し続けることは不可能だ。必ず連合軍は巻き返す。その時のために将兵は今日は降伏して生きるべきだ」⁽²⁵⁾と言う、戦争を長期的展望で見ての行動計画、そこには、自らが長年にわたって行ってきた「力」を以てしての植民地支配、異民族による統治と言うものの本質を充分承知しての判断が働くのだった。正鵠をえた決断と評価できる降伏と、兵力の多くをオーストラリア

へと撤退させた例にみられる欧米人の物の考え方、あるいは、「死生観」、ここには、「華々しく散る」と言う、一面から見れば「潔い」が「無駄」と言える「散華」、「玉砕」はないのであって、ここに彼我の「死生観」の違いを見せられるのである。

その点で、「生命」とは、「神」から「人間」に与えられたものであると言う考え方が、そこには介在していると言えるのだろうか。

一方、日本人の精神構造、「生命」に対する考え方は如何だっただろう。

日本人の物の考え方の中に「武士道」と言うものがある。この「武士道」を形づくる物の考え方の重要なものとして、「武士道といふは死ぬ事と見つけたり」と言う「葉隠」の言葉が良く使われるのである。

そして、そこには、「滅びの美学」とも言う「死」に対する一面の美意識を感じさせられる物の考え方が存すると言えるのだが、これを如何に考えたら良いかと言う事である。

そこには、「死」が、美しいものであると言う考え方がなされるのではあるが、その一方では、それは、その「死」の軽視にも繋がる考え方を内在していると言わざるをえないのである。

そして、それは、「身を鴻毛の軽きに致す」と言った言葉にも繋がりを持つ事になるのである。

そうした「鴻毛の軽きに致す『生命』」と言った日本人の物の考え方は、明治維新の殉難者を祀った事から始まり、「日清・日露の闘い」、「第一次大戦」を経て、「大東亜（太平洋）戦争」の開戦とそれに続く時代にあっては、「神国（神州）日本」と言う考え方が、更に、強調され、そこには、庶民であっても国家・社会のために死んだ者は「神」に祀られると言



靖国神社 社殿

う、今日、国際的に問題になっている「靖国神社問題」と結びついた一面を生み出す事になる考え方を強めていったのである。

だが、これも、それ迄の我が国の特徴とも言える、「基本的人権の尊重」とか、「人間の尊厳」と言ったものとは裏腹な、「個」の埋没に繋がる発想が介在していると言えるのである。

そして、それは、上は東條英機首相・大将から、下は前線における将兵に至る迄の考え方として広まっていくのであるが、それは、また、国民一般の考え方としても定着していくのだった。

それは、更に、「君恩に報いる」に「鴻毛の軽きに致す」と言う発想を以て、「上御一人」と言われ、「現人神」として人の姿となってこの世に現われた「神」である、万世一系が尊重される「天皇」の「君」としての存在を大きくし、それと結びつく事によって、「股肱の臣」、「天皇の赤子」と言う考え方（思想）が生まれ、これが強調されてくるのである。

そこに、「神である『天皇』が統帥する『神兵』によって編成された『皇軍』」と、極東の小さな島国でありながら、欧米列強に対抗するために生まれた「大日本帝国」の呼称とが結びつき、昭和前半期の「神憑り」的空気（風潮）の中、「神兵」を包含した軍（隊）至上主義を醸成させていくのである。

だが、その一方では、士官学校を出たであろう将校を始めとする「皇軍」の「神兵」達だが、戦後60年余り経た今日においても十分に解決されていない「慰安婦」を相手に、甚だ以て人間的行動を示して今日に迄問題を残している一面があったのである。そして、インドネシア地域にあっては、現地インドネシア人女性は固より、宗主国であったオランダ婦人に対してもこれが行われ⁽²⁶⁾、バリ（島）とて例外ではなかったと言われている。

そう言いながらも、「半ズボンと胸当てだけで歩き回っていた」ため、「肌を出すな」、「きちんとした服装」をするようにと言われ、自分達も「私たち、おいしそうじゃないのよ」と言っていたと言う、前出のコレインは、「私たちの敵について、良かったと言えることが一つある。一人も強姦されることがなかったことである。（中略）日本の兵隊が捕虜の女性に性的暴行を加えることは、はっきりと禁止されていて、もしそうした行為に及んだ兵隊がいたら、厳しく罰せられることになっていたそうだ」⁽²⁷⁾と言う記述をしているのである。

「現人神」である「天皇」を「絶対的存在」、「精神的支柱」として偶像化しそれを醸成させると共に、それとの関わりを持つ事で以て、国民は一人一人、自らの位置づけをし、その存在理由、存在価値を確認すると言う事で以て、その「安心・立命」を得ようとする一面があったのだった。

こうして、「安心・立命」を得た人々は、それを「君恩」と感じ、恐懼する側面を持ち、時に、自らが「君恩」に添いえなかったとした場合には、それを、「死」を以て詫びるという考えを持つに至るのであり、その「死」にあたって、古来、「切腹」が潔いとされてきて

おり、その風潮に従う者が昭和の時代にあっても多かったのである。特に、軍隊において。

尤も、「大東亜（太平洋）戦争」にあっては、こうした「切腹」を始めとし、自決してその「責任」を果していった者の多くが下級の者達だったと言うところに問題があるのだった。「君恩」に報い得なかったとして、それが、合理性があるか否かに関わらず、「死」を以てその「責任」を果すとか、「その罪万死に値する」と言う形での「死」、これは、「大東亜（太平洋）戦争」にあって、戦線を守り得なかった前線の指揮官が局地線に敗れ、その責任をとってのそれが多かったのである。

こうした事が本人自身によって行われている分にはまだ良いのだが、それをその「責任」を曖昧にしている組織や上官から、恰も、自らの意志で行ったと言う形を以ての強要、所謂、「詰め腹を切らされる」と言う形をとらされた場合、それは悲劇である。

「戦いの終わったのちの、誤解や上長の悪感情が、悪戦苦闘した部隊長を殺した。搜索二十三連隊長の井置中佐は、九月十六日夜、ファイ高地よりの無断撤退の責を負わされて將軍廟の草原で自決した。第八国境守備隊長の長谷部中佐も同じく、ノロ高地よりの撤退の責を負わされて、九月二十日にノモンハンの塹壕内で自決。歩兵第七十二連隊長の酒井大佐は、負傷後移送され、病院で責任をせまられて九月十五日にチチハルの病院で自決した」⁽²⁸⁾と言われ、「とくに第二三師団の被害は悲惨だった。出動兵力一万五一四〇人の七九パーセントにあたる一万一九五八人を損耗した。小隊長以上の将校二九〇人のうち、二二〇人が華と散った。全滅としかいいようがない。連隊長級の最期のみじめさがそれを象徴している。山形大佐（歩兵第六四）と、伊勢大佐（野砲一三）は戦場で自決。酒井大佐（歩兵第七二）、井置中佐（搜索第二三）、長谷部大佐（第八国境守備）は事件後に自決。そして、元歩兵第七一連隊長長岡大佐は負傷入院中に斬殺されている」⁽²⁹⁾と言う、「ノモンハン事件（ハルハ河の戦い）」（昭和14（1939・5－9））での責任を取らされた、中間管理職とも言える連隊長以下の指揮官達の「死」が言われているのである。

固より、「ノモンハン事件（ハルハ河の戦い）」にあっては、未だ、後に見る日本軍将兵ががんじがらめにして「死」に追いやった「戦陣訓」はなかったが、これを生む風潮・空気は既に横溢しており、彼らはその犠牲となったのである。

これらは、「大東亜（太平洋）戦争」に先立つ事ではあるが、この風潮・空気は更に強まり、「正確には『陸軍訓令第一号』と呼ばれ命令に準ずるものである。しかし『陸軍にあつては、絶対的な命令以外の何物でもなかったのである。（中略）海軍もまったく同じように受けとった。これにより日本軍人のすべてが、捕虜になることを許されなくなったのである』」⁽³⁰⁾と言われる。昭和16（1941）年に東條英機陸相によって発せられたと言う「戦陣訓」の「生きて虜囚の辱めを受けず」と言う一項により、決定的となり、それが正式な命令なくしての「死刑」である自決の強要を強めていくのである。

その点では、形の上では志願ではあったが、自由意志が認められる雰囲気ではなかった特攻隊（特別攻撃隊）も軌を一にすると言えるだろう。

事を決するにあたり、閣議、最高戦争指導会議、御前会議と言ったところで議論され、御前会議において大勢が傾いたところで以て裁可されると言った形をとり、閣議を主催する首相が最後の責任をとるわけでもなく、時に、御前会議の中で、閣議で決した事が軍部によって覆される事があったのだが、では、誰が責任をとるのかと言う事になると曖昧だったと言った体制。



宮城（皇居）

「会議の前に首相や、参謀総長や軍令部総長らの報告をうけ、天皇はしばしば質問している。また木戸内大臣、侍従長、武官長らからいろいろ情報を聞いていた。そのうえで、御前会議に出席するのである。それゆえにほとんど儀式的に進行しているが、その決定の外側に天皇がおかれていたわけではない。だが、法的には責任は一切ない。

では、責任は政府にあるのか。これが実に曖昧であった。憲法には、ただ一条『国務大臣は天皇を輔弼（または輔翼）するものとして、政府と、陸・海の統帥部が独立して、天皇と結ばれていた。これら三つのものが、それぞれ責任をもち、それぞれに対して責任をもたない。だから最終の国家としての責任は、誰もがもってはいなかった。いや、もてなかった』⁽³¹⁾と言われる、「御前会議」だったのである。

この点については、「和を以て貴しと為す」と言った我が国固有の「心」、 「伝統」、それに、「阿吽の呼吸」等が結びつき、「責任」を明らかにする事なく物事が決せられていくと言う精神風土を醸成させてきたと言えるのだが、これは、平和時にあってはともかくとして、一刻を争う事が多い戦時にあっては、指示命令系統の明確さとそれに伴う「責任」の所在が要求されるにも関わらず、それが不明で、「従軍慰安婦問題」と言った事から始まり、「大東亜（太

平洋) 戦争の責任者は誰か」と言う事になると未だ明確化されないで今日迄来ている体制。

この点から、日本(人)には「責任」を追求する事を好まぬ習性、精神構造を持っているとも言えるのであって、それは、今日にあっても、最も「責任」を明らかにしなければならない政治や行政の世界(官僚機構)に見られる事であり、彼らは軍人とは違うがエリートであり、専門家であるのだが、ここに、「世間の常識」が通りにくい側面が存しているため、今日、色々な省庁で物議を醸しているのである。

「『恥』の文化」と日本の特徴について言われる事がある。そして、それと結びついた「滅びの美学」。それらの行きつく所に、「切腹」による「死」を以ての「責任」を完うすると言う事があるのである。

こうした人命軽視とも言える美学を持つ日本人の美意識、精神構造、これらは長い歴史の中で形づくられたもので、日本人だから即これらに結びつくと言うものではないが、それらに慣れた行動様式は、戦争と言う破壊と損耗を伴う行為の中にあっては、随所に「負」の要素を露呈するのだった。

「一銭五厘の赤紙で兵隊は幾らでも集る」とか、「菊の御紋章のついた銃の方が兵の命より大事だ」と言われていたと伝えられているが、正に、人命軽視の極みと言わざるを得ない。

その点で、「第一線将兵は今日、其の必勝を信じ、敢闘しつつ在り。若者は勇躍大義の為、喜んで死地に就きつつ在り。(略)然るに、新爆弾に脅へソ連の参戦に腰をぬかし、一部条件を附し在りと雖(いえど)、全く『敗戦者なり』との觀念に立てる無条件降伏を応諾せりとの印象は、軍将兵の志気を挫折せしめ、国民の戦闘意志、さなきだに低下せんとしつつ在る現況に、更に拍車を加ふる結果となり」⁽³²⁾と、前出の日記で東條は言うのだが、この期に及んでの戦争指導者のこの言をどう考えるか。

また、「たった一銭五厘で次から次へと集められる兵隊の価値は馬より低く扱われたが、前線に送られるときの兵隊たちは、正にブタや牛なみの扱いだった。軍の輸送船のひどさは奴隷船にたとえられ、地獄船ともいわれた。12畳(約20平方メートル)ほどの船室に三段の棚を設ける。一段のスペースはが二畳くらいになるが、ここに七～八人の兵隊が押しこまれるのである」⁽³³⁾と言う記述。

そして、更に、「ガダルカナル島は戦死者8,200人、餓死、病死した者1万1,000人という多大な犠牲者を出し、インパール作戦と並び太平洋戦争史上もっとも凄惨な戦いが展開されたといわれている。このガダルカナル島へ向う船(中略)諏訪丸。(中略)さいわい敵艦の襲撃をうけず通過できたものの、今度は熱帯の蒸し暑さが兵士達を苦しめ始めた。おまけに水が足りない。水をやらないとダメなのが馬である。軍馬がバタバタ死んでいった。足りないのは水だけではない。食糧、とくに野菜不足のため、兵隊たちが次々と壊血病にかかっていった。(中略)兵士達の体は衰弱し、精神的にも参りはじめ、明らかにおかしくなった者

も出た。ブツブツなにか言う者。突然、ズボンの前を開け自慰を始める者」⁽³⁴⁾と、コロンプスの時代の航海者を苦しめた壊血病が、20世紀の時代にあって、これから戦場に向う兵士を悩ませたのであり、しかも、彼らの向った先が、戦死者よりも餓死者の方が多く出る事になる「餓島」のガダルカナルだったと言う事で、彼らの行く末も「悲惨」の何ものでもないのである。

「1,000キロ離れたガ島から生き残った兵隊の一部が帰ってくるということは耳にしていたので、そばに近づいてみると、(中略)皆ボロボロになった軍衣をまとい、憔悴しきった枯れ木のような体を横たえ、あるいは足を投げ出して座り込んでいた」⁽³⁵⁾と言われるのである。

こうしたガダルカナルを含む太平洋での戦いについて、「太平洋戦争では二百五十万人の日本兵が亡くなりましたが、そのうち七割ぐらいが広い意味での餓死なんです。こういう戦争は他に類例を見ません」⁽³⁶⁾と言う指摘がなされるが、これは、正に、「兵站」の不備の何ものでもなく、こうした戦争計画、作戦を立てた軍人達、また、これを認める事になった戦争指導者、政治家、そして、世の中の風潮・体制をどう考えたら良いのだろうか。

これらは全て、「人命軽視」に繋がる事であり、こうした計画をたてたのが、「責任」の所在を明確にしない軍部のエリート、参謀達に多い軍人官僚だったのである。

彼らは、ニューギニア戦線の敗色に伴っての、「ニューギニア死の行進」と言われた転進(敗退)に際して、「地図のうえだけで参謀がななめに線をひっぱり、三日か四日でゆけるという計算がたてられた。(中略)参謀達は線だけひっぱっておいて、自分達は飛行機でバボへ飛んでいった。しかし歩いていった部隊の運命は悲惨だった。三日から四日の行程というので、食糧の携行は一週間分。それが、一番早いので一ヶ月半か、二ヶ月半かかったのだ」⁽³⁷⁾と指摘されるのだが、この一事だけが例外だったわけではなく、「世間の常識」を理解しようとせず、机上の空論に走った参謀達によって作戦が計画され、実行され、そこには、将校を含む前線の兵士達が「人命の軽視」の渦の中に巻きこまれていくのである。

こうした「人間の尊厳」、「基本的人権」を無視した「人命軽視」、それが「恥の文化」とか「滅びの美学」として、一面、肯定的に日本人に捉えられている間はまだしも、これが、文化の違う、異なった価値観を持った者達との関わりの中で現実化された場合、それは当事者達にはどう受けとめられたかによって、その価値判断は左右に分かれるのである。

「バター死の行進」と言う一事が有名で、これに携わった者の中に戦後、残虐行為の廉で有罪とされ処刑された者がいたのだが、それも、彼等の価値観の相違が悲劇を生んだとも言えるのである。「ニューブリテン島の各所にも米豪軍が上陸してきた。(中略)生き残った者はラバウルへ向けて撤退することになった。遠い所で500キロ、近い所でも200キロの道のりを1ヶ月から3ヶ月かかって」⁽³⁸⁾とある「ニューギニア死の行進」にしても、それは

作戦遂行上のそれであり、30キロから40キロの武器・弾薬等の装備を携行してのものであって、日本軍では重装備での行進は当たり前であり、時には、分解した大砲を背負っての行進も珍しくなかったのだが、それに対してバターのそれは、身一つのもので、距離も60キロ程度の行進だったとの事で、そこに殴打（ビンタ）を含む、捕虜達にしてみれば残虐行為と捉えられる行為があった事は事実であったとしても、その様な事は日本軍にとっては当り前の事だったのだが、彼我の認識の違いがそこに働き、それが日本兵の糾弾をもたらしたと言える一面ではないだろうか。

こうした日本人（兵）の「生命」に対する考え方は、彼らが進出（侵攻）したそれぞれの地域（国）、その人びとに当然の如くに反映される事になるのであり、日本軍が開戦当初の優位から西太平洋の、今日、東南アジアと言われる地域から、遠くオーストラリアの近くに至る迄の広範囲にわたる地域に展開したために、それぞれの地に多くの問題を残すのだった。ペリリュー島では、「自活、自戦、永久抗戦」と言う命令が出たと言う。そして、「玉砕」するのだった。

「人間の尊厳」を無視した行為である殴打（ビンタ）は軍隊は元より、社会生活においても日常化しており、それは、小学生だった筆者にも学校の先生によって及び、それは戦後になっても男子校にあっては、昭和40年代に至っても当り前の如くに見られた光景だった。

「なかなか景色のいい所だと思いましたよ。前線に送られて、敵が来ない時は陣地構築。一日中穴を掘ったり木を運んだり、重労働です。古兵によく殴られました。言うこときかんし、なまけているから。めしの炊き方が悪いといっちゃパチパチ。小便が長すぎるといってパチパチ」と、漫画家みずき・しげる氏が平成20年8月12日（火）付朝日新聞夕刊に、「追憶の風景 ラバウル（パプアニューギニア）」と言う一文の中で記しているが、当時の日本兵には日常茶飯事だったこうした事、これを捕虜や現地の「ロームシャ（労務者）」に行えば、明らかにそれは「虐待」と認識されたであろう。戦後それによって戦犯として処刑された者も少なからずいたのである。

捕虜に「木の根っ子を食べさせた」として戦犯にされた者もいたと言う話を聞いた事があるが、日本人は根菜を良く食べるのだが、この辺りで誤解をうける事はなかったのかという事である。それぞれの民族が持つ文化の特徴は、その「食」と「言葉」に最も良く現われていると言えるのであって、それは個々の人間の対応が好意的であったか否かで、その受けとられ方が違って来るのだが、戦局の変化に伴って、衣・食・住を基本とした物資の補給の困難さから、本質的、構造的に、搾取、強制労働、時に、虐待と捉えられる捕虜や現地の人びとへの対応が随所に現われる事になり、彼我の人々に不幸をもたらしたのである。

こうした「物質」、「物資」の欠乏に伴った強制、虐待等とは別に、日本人（兵）の無知、「思い上がり」によるアジアの人々に対する無法、無謀な行為が、「大東亜共栄圏」、「八紘一

宇」の掛け声とは違った方向へ多くの人々を導くのである。

そうした日本人（兵）の中に、バリ（島）に駐屯していた「特警隊（海軍特別警察隊）」隊長山本の話は有名だったようだ。

「特警隊は、その乱暴ぶりから「トッケイ」と、バリ人にも恐れられた海軍の警察部隊、憲兵隊である。そのリーダーは『獅子鼻で残虐』として知られた山本隊長で、彼は厳しく抗日活動家たちを逮捕して過酷な尋問をくわえた。トッケイのヤマモト、いまでも多くのバリ人が名前を覚え、憎しみを忘れないほどである」⁽³⁹⁾と言われるのである。そして、また、「バリ島には当初上陸した陸軍が残っていた。この上陸部隊は荒くれ者ばかりだったという。〈兵士たちの顔つきは^{どうもう}獐猛で、頬髯を伸ばし、目つきは鋭く汗臭く、言葉遣いは荒々しかった。言葉のわからない住民が突然「バカヤロ」と怒られたり、日本軍兵舎の前に立つ衛兵にお辞儀をしなかった場合には^{ビンタ}をはられたりした。頭に荷を乗せているバリ人女性はもっと大変で、荷物が頭から落ちてしまうので、一種の虐待のようだった〉（バリの歴史書『闘うバリ』より）『バカヤロ』『ビンタ』に加え、ロームシャ、イアンフなどはインドネシア語辞典に載り、いまでもバリの一般の老人たちがよく覚えている言葉である」⁽⁴⁰⁾とも言われるのである。

そして、それは、「陸揚げがはじまると、日本人たちは、軍属や民間人も含め、荷物担ぎをさせられた。元日本軍の捕虜だったオランダ人たちは、『お前らの捕虜になったときと同じ仕打ちをする』と、荷物担ぎの日本人たちを鞭打った」⁽⁴¹⁾と言われる如く、戦後、捕虜となった日本人（兵）に対して報復が行われる事になるのである。

この点に関しては、筆者の旧知のドクター・グデ・グリアも、若き日の体験として、山本隊長を始めとする憲兵（トッケイ 特警〈特別警備隊〉）の「恐ろしさ」について語ってくれたのだった。

軍のエリートによってもたらされた「大東亜（太平洋）戦争」は、彼らのエリート故の「無知」と「思い上り」が進出（侵攻）先の事情についての認識不足を来し、それが彼我の人々に多くの不幸を招く事になったと言えるのである。

結

「大東亜（太平洋）戦争」の開戦とその遂行に携わった軍のエリート、彼らの物の考え方、時代感覚の根底に存していたと言えるのが、「天皇」を「現人神」とした「神国（神州）日本」と、それに伴った「神州不滅」の思想、国家観である。

この点で、既に、物事を客観的、合理的に考え、これを処理し得うる能力、立場になかったにも関わらず、現実には、彼らによって指導されたところに「大東亜（太平洋）戦争」に伴った悲劇が随所に起こるのである。

そこには、「敵さん給与」にみられ、内地にあっても貧弱な食事内容だった「食糧」の供給を始めとする「兵站」についての杜撰な計画から始まる、「基本的人権の尊重」は疎か「人命軽視」に繋がる軍隊における在り方、殴打（ビンタ）の日常茶飯事は固より、詰め腹を切らされての自決としての切腹の強要、「玉砕」、「特攻」等が常態化するようになった日本軍。

こうした日本軍を指導したのが陸軍幼年学校、士官学校、陸軍大学校、そして、海軍兵学校、海軍大学校出身のエリート、専門家達だったわけであり、その点では、陸軍も海軍も変わりはないと言えるのである。

銃後においても戦争に備えるための「物質」、「物資」の不足から、「食糧」を始めとする「耐える」事を余儀なくされた日本（人）は、外国にあっても、現地の人々に対して、自分達が行っている事、日常化していた欠乏している「食糧」事情に耐える事、過酷な労働、そして、殴打（ビンタ）等を当り前の事としてそれを行えば、これは残虐行為と受け取られるだろうし、唯一絶対の神を信じている者達に、「現人神」がおわせられる「宮城」に向って「遥拝」させたとすれば精神的苦痛を与えた事にもなるのであるが、これらを士官学校出身の将校も躊躇なく行っていたのである。むしろ、進んで行った一面もあるのである。

その点で、他の国々の人々と接するには、その国の事情、その人々の事を余程良く理解して関わらなければならないのは現在においても言えるのである。

ましてや、戦争が進むに従って、敵性語として英語の授業がなくなったと言う一事からしても、戦争に対する大局観を失ったエリート、専門家の指導の誤りが、一つバリ（島）の「特警」にも現われていたと言えるのである。

注

- (1) 西岡香織『アジアの独立と「大東亜戦争」』 芙蓉書房出版 1996 207頁
- (2) 鬼川太刀雄『ラーゲリ歳時記』 岩波 1993 100頁
- (3) 同上書 100頁
- (4) 榊原政春『中尉の東南アジア軍政日記』 草思社 1998 16頁
- (5) 同上書 153頁
- (6) Raden Hadji Iwa Kusma Sumantri *Autobiography dari Prof. Iwa Kusma Sumantri* 1971 Stenc:1 後藤乾一訳『インドネシア民族主義の源流 イワ・クスマ・スマントリ自伝』 早稲田大学出版部 昭和50 9頁
- (7) 坂野徳隆『サムライ、バリに殉ず インドネシア独立戦争の英雄になった日本兵の記録』 講談社 2008 23-4頁
- (8) 谷川栄彦『東南アジア民族解放運動史』 勁草書房 1969 293頁
- (9) 石井正紀『石油技術者たちの太平洋戦争 戦争は石油に始まり石油に終わった』 光人社 2008 112-3頁
- (10) 同上書 133頁
- (11) 八木弥太郎『ラバウル南溟記 戦場に果てし霊を安らかなれ』 光人社 2007 115頁
- (12) 同上書 116-7頁

- (13) 三野正洋『続・日本軍の小失敗の研究 未来を見すえる太平洋戦争文化人類学』 光人社 2005 65頁
- (14) 読売新聞20世紀取材班編『20世紀 大東亜共栄圏』 中央公論新社 2001 17頁
- (15) 「大東亜共同宣言」『ブリタニカ』
- (16) 「大東亜会議」『ブリタニカ』
- (17) 「大東亜共栄圏」『ブリタニカ』
- (18) 石井 前掲書 50頁
- (19) 歴史探検隊編『50年目の「日本陸軍入門」』 文藝春秋社 1992 195-6頁
- (20) 同上書 196頁
- (21) 同上書 175頁
- (22) 八木 前掲書 72頁
- (23) Helen Colijn (ヘレン・コレイン) 'DE KRACHT VAN EEN LIED' Uitgeverij Van Wijnen 西村由美訳『歌の力 日本軍女性収容所を生きる』 木犀社 2001 138-9頁
- (24) 原 康史『激録 日本大戦争 第三十二巻 マレー、比島、蘭印の激戦』東京スポーツ新聞社 1990 275頁
- (25) 同上書 283頁
- (26) Jan Ruff-O'Herne (ジャン・ラフ＝オハーン) 渡辺洋美訳『オランダ人「慰安婦」ジャンの物語』 木犀社 1999
- (27) Colijn (コレイン) 同上書 140頁
- (28) 半藤一利『ノモンハンの夏』 文藝春秋社 2001 440頁
- (29) 半藤一利『ドキュメント 太平洋戦争への道 「昭和史の転回点」はどこにあったか』 PHP 文庫 1999 196頁
- (30) 三野 前掲書 57-8頁
- (31) 半藤『ドキュメント』 288頁
- (32) 「東条元首相 終戦直前の直筆メモ(抜粋) 8月10日の項」
- (33) 歴史探検隊 前掲書 137頁
- (34) 同上書 148頁
- (35) 八木 前掲書 42頁
- (36) 坂本多加雄, 奏 郁彦, 半藤一利, 保坂正康『昭和史の論点』 文春新書 186頁
- (37) 歴史探検隊 前掲書 227頁
- (38) 八木 前掲書 91頁
- (39) 坂野 前掲書 78頁
- (40) 同上書 32-3頁
- (41) 同上書 72頁

Research Note

The Social Climate and Linage in Bali

Masamichi MATSUBARA

Last time I tried to research about the education in Bali under Japanese occupation using the book 『日本占領下 バリ島からの報告 東南アジアでの教育政策』 written by Suzuki Masaharu.

This time, I try to research the background of the war of 'Daitoua Sensou', especially, the relation between Japanese and other Asian people.

At first time, they received Japanese (soldiers) friendly, but, the situation changes in process of time, Japan pushes his way to the defeat.